

終わりになき紛争

福田 裕昭

学校法人立教学院理事長

ウクライナ戦争の終わりすら見えない中、世界はさらに、もうひとつの戦火を抱え込むことになった。2023年10月、中東パレスチナで歴史的憎悪が呼び覚まされようとしている。筆者がこの原稿を書いているさなか、メディアは連日、中東情勢を伝えている。

今から10年前、筆者はイスラエルからパレスチナ・ガザ地区へ向けて緩衝地帯を歩いていた。テレビ東京報道局員として、パレスチナ難民を取材するためだった。ガザ地区はイスラエル南西部に位置し、長さ約50キロ、幅5キロから8キロという細長い地域だ。地中海側はイスラエルの警備艇が出入りを監視している、残る境界は高さ8メートルの壁で塞がれている。壁と金網に囲まれた緩衝地帯は、まるで刑務所への道だ。約600メートルを歩いた。検問でのチェックを経てパレスチナ側に入ると、そこには難民たちの古びた居場所が広がっていた。1948年第一次中東戦争以来の難民キャンプ。道路や排水といった生活

インフラは老朽化し、水路には汚水が垂れ流され、ひどい悪臭がした。国連の車両で町の病院に到着した。出迎えたのはUNRWA・国連パレスチナ難民救済事業機関保健局長の清田明宏医師だった。長年パレスチナ難民のための医療に携わる清田さんは「この住民の多くが肥満を抱えている。毎日同じパンを食べていて食事が偏っている。それに公園やスポーツ施設が無いから運動不足だ。長年のストレスも加わり、糖尿病や高血圧といった生活習慣病に罹る人ばかりだ」と言う。診察に来ていた70歳代の男性は生まれた時から、ガザで難民生活を続けている。

ユダヤとパレスチナの対立を双方の若者たちはどう見ているのだろうか？ 私たちはこの取材の中で、エルサレム旧市街のアルメニア料理店でユダヤ人とパレスチナ人の学生2人ずつによる食事会を開いた。しばらくは双方の主張を繰り返すだけだったが、ユダヤ人の女子学生がぽつりと「子供の頃からアラブに対

する怒りや憎しみを植え付ける教育を受けてきたから、その気持ちを变えるのは難しいのです」と話し始めた。すると、それまで食べることに夢中だったパレスチナ人の男子学生が「対立は長年の政治問題であるけど、何度も話し合えば解決の糸口はあると思う」と応じた。テーブルにはフムスと呼ばれるひよこ豆のペーストの大皿があり、双方の若者たちはこれが好物のようで交互に手を伸ばしていた。どちらからともなく、両者の笑い声が店内に響いていた。あの日から10年、あの若者たちは、今、何を思っているだろうか。

アラブ世界について取材を進める中で、筆者は大切なパートナーを失った。フリージャーナリストの後藤健二さんである。彼はシリアで「イスラーム国」と呼ばれる武装組織に拘束されて殺害された。後藤さんはレバノンで戦場ジャーナリストとしての訓練を受けた経験があり、非常に慎重な取材者だった。筆者と共にリビアで「独裁者カダフィとは」という

テーマで取材した際、いくつか指導してくれた。それが次の3つ。①危険地域では長居は無用。一か所に15分以上とどまると、取材を見物している住民の中に通報者がいて、危険な輩がやってくる。②宿泊施設や食堂では外からの発砲を避けるため、窓には近づかないこと。③現地のガイドを信じないこと。様々な助言だった。「次はイラクを取材しましょう」と話していた後藤さんは、その前にシリアで拉致されてしまった。彼自身が最も不本意な形で殺害されてしまったのだと思う。

そして今、パレスチナで戦火が広がろうとしている。中東紛争に終わりが来ない。今回もジャーナリストは危険な現場にいらるだろう。取材では準備を怠らず、用心してもらいたい。ただ、やめろとは言わない。何故なら、誰かが事実を伝えなかつたら、その歴史がなかったことになってしまうからだ。歴史の空白を作ってはならない。